

Book Review

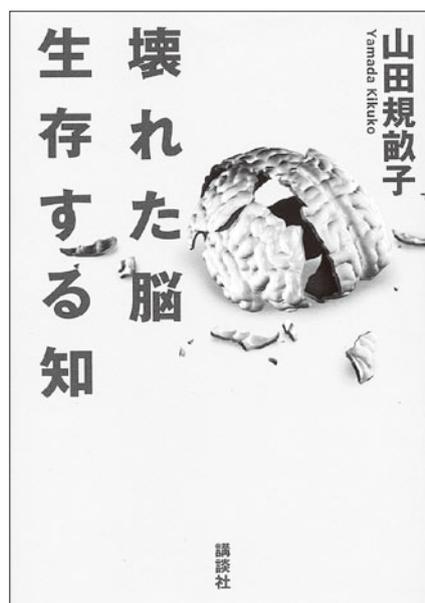
座右の書から思い出の本まで、リレー形式でつなく読書案内。

玉川で教える先生方に「この1冊！」を紹介していただきます。

今月は

脳科学研究所 松田哲也先生

脳が壊れても 様々な経験が 人生を豊かにする



『壊れた脳 生存する知』

山田規畝子 著
●講談社

急に時計が読めなくなる、階段の段差がわからなくなる時のことを想像したことがありますか？

この本は、医師でもあり患者でもある著者本人がこれまでの体験をまとめたものである。彼女は3度の脳出血を起こし、様々な後遺症を抱えている。その症状を医師という立場から詳細に伝えている。

時計が読めない、階段の段差がわからないという症状が出る状態は、高次脳機能障害と言われ、他にも和式の便器に足を突っ込んでしまう、トイレの水の流し方が思い出せない、靴のつま先とかかとを逆に履こうとしてしまう——といった、これまで当然のようにできていたことができなくなってしまう障害である。

失敗しないように、と気を付けているにもかかわらず失敗してしまう。ただし知能は保たれているので、その失敗の内容はすべて理解できる。著者は、

この現実をなかなか受け入れられずに悩んでいた。しかし、高次脳機能障害になって初めてわかったことがたくさんあった、と気がついたときに「これも人生だ」と考えを新たにしよう。

著者はこの本のなかで「何のために勉強するの」と子どもに聞かれたら「脳が壊れてもちゃんと生きていくためよ」と答えたい、と書いている。脳の一部が壊れたとき、脳は残された正常な機能を総動員して壊れた部分を補い、危機を乗り越えようとする。脳が壊れて貧弱な思考しかできなくなっても、その人の経験から作り上げたこれまでの記憶をもとに人生の選択や判断をしなければならぬ。だから、元気なうちに何でも経験したほうがいいと……。

この本は、脳の機能についてわかりやすく解説しているが、それ以外に人生とは何だろうか？ を考えさせられる1冊でもある。

これもおすすめ



『サブリミナル・マインド——潜在の人間観のゆくえ』
下條信輔 著／中公新書
●無意識とは何か？ 一見自由な意思のもとでの行動は、本当に自由なのか？ われわれは無意識のうちにかなり操られているということを実感させられる本である。



『前頭葉は脳の社長さん？——意思決定とホームクルス問題』
坂井克之 著／講談社ブルーバックス
●脳の司令塔といわれる前頭前野は、以前は“物言わぬ領域”とされていた。前頭葉の働きについて、実験の結果を踏まえてわかりやすく解説する。



『考える脳・考えない脳——心と知識の哲学』
信原幸弘 著／講談社現代新書
●心は脳で処理されると考えられる一方で、脳ではなく外部環境の中で展開されるという説もある。脳と心の問題を哲学的観点からとらえる。

次回は学術研究所の佐々木哲彦先生です